



Title	19世紀英国のデザイン教育における色彩論の形成過程 ： 官立デザイン学校を中心に
Author(s)	竹内, 有子
Citation	デザイン理論. 2015, 66, p. 84-85
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56329
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

19世紀英国のデザイン教育における色彩論の形成過程

— 官立デザイン学校を中心に

竹内有子／大阪大学

光のプリズムの7色を定めたニュートンの『光学』以来、近代西欧では色彩論の刊行が相次ぎ、画壇・産業界に影響を与えていく。英国においては、自国の化学者・顔料と染料の製造業者であるジョージ・フィールド (George Field, 1777-1854) の色彩論が19世紀半ばまで大きな影響力をもち、ロイヤル・アカデミーの画家たち、例えばターナーやコンスタブルからラファエル前派、さらには官立デザイン学校 (Government School of Design) のデザイン教育者たちにも幅広く参照された。

本発表の目的は、官立デザイン学校が構築したデザイン教育施策において、教授された色彩論の概要とその形成過程を明らかにすることである。芸術総監督リチャード・レッドグレイヴ (Richard Redgrave, 1804-88) から同校の関係者たちは、参照すべき色彩論として、フィールド、室内装飾家のヘイ (David Ramsay Hay, 1798-1866)、フランスの化学者シュヴルール (Michel Eugène Chevreul, 1786-1889) らの書物を挙げている。彼らは、フィールド『クロマトグラフィー』(1835年)を中心に、シュヴルール『色彩の同時コントラストの法則』(パリ 1839年)を加えた理論を基礎として、学習用テキストを作成し、デザイン教育に役立てようとした。

まず第1章「英国の画壇における色彩論の必要性」では、ロイヤル・アカデミーの色彩観について説明する。というのもフィールドの色彩論が、アカデミー会員の色彩問題に関連していることに加え、1837年に国家が最初に関与して創設された官立デザイン学校の教

師と関係者たちが、アカデミー会員から起用され続けてきた事実があるからである。

1. 1. ロイヤル・アカデミーの教え

アカデミーは初代会長ジョシュア・レノルズ (Joshua Reynolds, 1723-1792) の講義に明らかなように、当初、精神に関わる普遍的な問題を学ぶ場所と考えられていたため、特殊な感覚に依存する色彩教育については殆ど何も教えず、それは画家達それぞれが個人で解決すべき問題とされていた。

1. 2. アカデミーにおける色彩とヴェネツィア派の再評価

しかし二代会長ベンジャミン・ウェスト (Benjamin West, 1738-1820) の時代以降は、色彩に関して、科学知識と見なされるものが重要視されるようになり、それを絵画に応用した絵具などの顔料の問題、また絵の具をどう配置するかといった実技上の問題が考えられるようになった。

1. 3. ジョージ・フィールドの登場

こうした理論面・科学面・実践面からの要請に基いて、フィールドが活躍するようになる。絵具等開発の実践が彼に色彩理論との相関性を認識させ、1817年に『クロマティックス』をはじめとする著書を刊行させるに至った。1835年に刊行された『クロマトグラフィー』は、この論理を抽象的な議論ではなく、定量的な実験で経験的に明らかにしていた点で前著と異なる。フィールドは、「メトロクローム」と名付けた器具に、三原色の溶液を入れて測定した結果、「赤5・黄3・青8」の配合によって中和化がもたらされ、調和を導く関係となることを規定した。

フィールドの色彩理論はやがて、官立デザイン学校の教育のなかに受け容れられるようになるが、第2章「産業・デザイン界における色彩論の必要性」ではその理由を探る。

2. 1. フィールドの理論とデザイン教育の接点

フィールドは、「赤・青・黄の三原色」を基本にして、色彩調和を得る配合の原理（「等価色彩 Chromatic equivalents」）を定めた。のみならず、「色彩と素描」のあいだに類比関係を見出して、形態と色彩を地続きに論じている。三原色に対応する3つの原形「直線、折れ線、曲線」である。それはヘンリー・コール（Henry Cole, 1808-1882）たち、政府主導で産業を興し、その産業に欠かせないデザインを求めていた人々の狙いと一致していた。

2. 2. 官立デザイン学校の教育方針

英国政府はロイヤル・アカデミーの効力を疑問に付し、産業におけるデザインの重要性を認識した結果、官立デザイン学校を設立した。審議官兼教授に任用されたウィリアム・ダイス（William Dyce, 1806-1864）の奮闘にもかかわらず、その運営は順調ではなかった。しかし、彼が1842-43年にかけて作成した教科書『ドローイングブック』は、次に来る第二世代のデザイン教育者たちに大きな影響を与える。同校の再編に取り組んだコールと仲間たちは、色彩論に及び腰だったロイヤル・アカデミーより進んで、形態と色彩を一括して造形する官立デザイン学校の再編を構想することになる。

第3章「官立デザイン学校における色彩教育」では、同校の関係者たちがフィールドの色彩論をどのように受容したか、それを具体的に検討する。

3. 1. コール・サークルの色彩観

コールを中心とするグループのなかで、色彩論に熱中したのはオーウェン・ジョーンズ（Owen Jones, 1809-1874）である。ジョーンズは三原色がフィールドの色彩論で十全に生かされていると考え、1851年大博覧会の装飾計画にフィールドの理論を公に援用した。そのうえで自分の理論『装飾芸術における色彩の諸原理を定義する試論』を組み立て、22の提言を定めた。

3. 2. リチャード・レッドグレイヴのテキスト『色彩の基本入門書：教理問答集』

同じ立場に立ったのが同校のカリキュラムを策定したリチャード・レッドグレイヴである。彼の作成した教科書『色彩の基本入門書』は、フィールドとシュヴルールの理論を教育の現場に展開したものであった。第3章はそのプロセスをたどって、なおかつフィールド理論が実現されているデザインの現場にわずかではあるが触れて、官立デザイン学校の色彩理論の特色を確認する。



Redgrave, *An Elementary Manual of Colour with a Catechism: to be used with the diagram illustrating the harmonious relations of colour*, Chapman and Hall, 1853. (口絵／色図式)